SCR Press
Student Counseling Room Press
Vol. 27 2022.8.1. 日本工業大学学生相談室

大学生は多くの場合、発達段階としては青年期にあたります。青年期は親との関係からの自立がテーマになりやすい時期です。それはつまり、社会に出ることを目前に控え、これまでふつうだと思っていた親との関係あるいは家族関係の問い直し、洗い直しをする機会でもあるわけです。これができるかどうかで、見える世界の広さが変わってくると言っても過言ではないでしょう。

「世の中」＝「うちでは」

私たちが陥りがちな落とし穴の一つは「うちではこうだった」という世界観を「世の中こういうものだ」というところにまで拡大解釈してしまうことです。

たとえば、先生から「君はどう思う？」と聞かれるというワンシーンを取り上げてみましょう。いつも親の言うことを聞くことを奨励されてきた人は、この質問に、先生が求めている答えを探そうとするでしょう。一方、自分の考えを持つことを奨励されてきた人は、この質問に、自分に向けられた興味・関心を読み取るでしょう。

厳しく抑えつけられてきた人は、パワハラ上司に出会ってもパワハラと認識せず耐え続けるかもしれませんが、個を尊重されてきた人は理不尽な扱いを受けていることを速やかに認識し、パワハラ的関係からの脱出を図るでしょう。

広い世界を見るために

「うちでは」を「世の中」に当てはめているとき、しばしば「うちではこうだった」の方は忘れてしまっています。「ふつうの家庭だった」などとのんきに思っていたりするのです。すると、不当な扱いを受けても、親に逆らうものではないのと同様、目上の人に逆らうものではないと思い込んでしまいます。

実は自分はずいぶん親から「ふつう」とは言えないくらい抑圧されていたのでは？と認識することで、今も別の誰かからひどいことをされていることが見えてくるのです。その先には、「そんなにひどくない人だっている」という世界が見えてきます。

広い世界を見るために、「うちではどうだったか」と今一度問い直してみるのもいいでしょう。